君は王子様。

零雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君は王子様。

【Ｎコード】
Ｎ４９５８Ｈ

【作者名】
零雅

【あらすじ】
あたしには童話に出てくるような王子様なんていない。ずっと…そう思ってたんだ…。

プロローグ

プロローグ

～追憶～

あたしには童話に出てくるような『王子様』なんて

いないんだって思ってた。

これからもずっと、そう思って生きていくんだって

そう思ってた。

――――君が現れるまでは。

君は可愛い。

これは、高校生になったばかりの春――――。

「紫苑ーーーー！！」

初めて通る通学路で誰かがあたしを呼んだ。

「おはよう♪」

はじけるような笑顔。

整った顔立ちに大きな目。

可愛くはねた長く茶色の髪。

どこを見ても百点満点の彼女の名前は「天城　瑞希」

あたしの親友。

そして――――

「うん、おはよう」

あたしから色々なものを奪っていった人。

普段何気なく話している分には楽しいし良いんだけど、
こうして高校になったばかりの春からこんな笑顔を見せられると正直へこむ。
「今日から新学期だねぇ～。そうだ！紫苑に話そうと思ってたことがあるんだけど…」
瑞希はまた嬉しそうに笑う。
ほら、そんな顔して笑うから。
「君、新入生？可愛いね」
「？」
ここはもう学校の近くだからたぶん上級生の人だろう。
みんな瑞希のことを見てる。
「ありがとうございます」
さすがに瑞希もこの手のナンパはされなれてる。

「それでね…「キーんコーンカーンコーン…」

「やばっチャイム鳴っちゃった！」

「走ろう！」

あたし達は校門まで全力ダッシュ。

登校初日から汗かきたくないけど

登校初日から遅刻はもっとまずい。

あたし達が必死で走る中、その姿を教室から見てる人がいたなんて

あたし達は思いもしなかった。

「ふうん…可愛いじゃん」

君は知らない。

「よかったぁ～」

なんとか無事に校門をぬけたあたし達は、ほっと一息ついた。

そして、その先にはちょっとした人だかり。

「クラス分け、もう発表されてるんだ」

あたしも瑞希もそれとなく自分の名前を探す。

「明津　紫苑…、明津　紫苑…」

とりあえずAクラスにはない。

次はBクラス――――

「お前はDクラスだよ。明津　紫苑」

「えっ！？」

後ろを向くとそこには…知らない人？

あたしの知らない男子が立っていた。

「…誰ですか？」

「俺のこと知らねぇの？」

「知らないです」

「お前のひとつ前の出席番号」

「え？」

もう一度クラス分けの表に目を向けると。

「本当だ…」

Dクラス：1番　明津紫苑

本当にあたしの名前だ。

えっとその下は…

：2番　朝上春樹

「朝上春樹？」

やっぱり知らない…。

てゆーか、なんであの人あたしのこと…

「なんであたしのこと知ってるん…って、あれ？」

小さな疑問をなげかけたときには、もう朝上春樹はいなかった。

「？」

でも、同じクラスなんだしまた会えるよね？

「紫苑！」

「え？あぁ、瑞希」

「あたしはCクラスだったよ。

紫苑はDクラスだよね？離れちゃったなぁ～」

そっか、瑞希はCクラスだったんだ。

それにしてもあの人は…？

「ねぇ、瑞希さ」

「何？」

「朝上　春樹って知ってる？」

「えぇ！！？」

「ど、どしたの？」

瑞希が急に声をあげる。

瑞希は知ってるんだろうか？

「紫苑知らないの？同じ学校だったじゃん！

クラスは一回も一緒じゃなかったけど…。
すっごく有名だよ？かっこいいし…。
それにほら！サッカーで去年エーススストライカーだった人だよ」
「ふうん、そんなに有名なんだ」
あたしは全く知らなかったけど。
でも、そんな人がなおさらなんであたしに？
瑞希に声をかけるんなら分かるけどあたしに声をかけるなんて。
それもあたしの名前も知ってたし。
もしかしてあったこととかあったかな？
そんな疑問を抱えたまま、あたしは瑞希と教室へ向かった。

君は覚えてる？

瑞希と別れて教室に入ると、朝上春樹はまだいなかった。

まぁそりゃそうだよね。

みんなそれぞれ同中の友達のところへ行ってる。

あたしも適当に同中だった子と話して時間をつぶした。

チャイムがなると先生がやってきてあたし達は体育館へと向かった。

『えーでわ、これより入学式をはじめます』

まだ名前も知らない先生の声。

みんなまともに聞いてない。

って言ってもあたしもその一人。

祝辞だとかなんとか、そんなのまともに聞いてた覚えなんてない。

そんななか――――

『それでは、新入生代表・朝上春樹君』

「はい――――…」

朝上…春樹？

って、もしかして…。

一人の男子生徒が壇上へ上がる。

それはもちろん…朝に見たあの朝上春樹だった。

まさか新入生代表だなんて…。

朝上春樹がなにやら話していたことはまったく覚えてないけど

やっと顔だけは覚えられた。

その後もなにも頭に入ることもなく入学式が終わった。

教室に戻る途中。

「紫苑！」

「瑞希」

ちょうど教室に入る直前で瑞希に声をかけられた。

「どう？朝上君のこと、覚えられた？」

「ん、まぁ少しはね」

「えっと…それであたし紫苑に話したいことがあって…「おーい、早く教室入れー」

「あ、ごめん。先生来ちゃった。行くね？」

「うん…」

瑞希が何か話したそうだったけどあたしはそれを打ち切って教室に入った。

すると。

「よぉ、思い出した？」

「はい？」

あたしの席の後ろに朝上春樹がいた。

「だから俺のこと。思い出した？」

「えっと…思い出すというか…」

会った覚えもないんですけど…？

「あ、もしかして覚えてない？」

「あ、えっと…はい」

非常に申し訳ないんですが全く覚えてません。

…とは言えない。

「あっそ。まぁいいや。

つか、俺と話してていいの？」

「え？」

朝上春樹が手で黒板を示す。

「あーきーつー！」

「す、すみません…！」

やばっ。先生がっ…。

てか、あいつもなんで早く教えてくれないのよ…！

あたしは先生の方へ向き直って話をきく体勢を作る。

でも、あたしの頭を占めるのは朝上春樹。

どこかで会ったことあったかなぁ？

君は突然…。

「それじゃぁ、先生からの説明はこれで以上だ！
もう質問とかないか？
だったらひとりずつ自己紹介するぞー！」
先生の話を一通り聞くと、一人ずつ自己紹介をすることになった。
出席番号から行くのが定番だからこりゃあたしからだな…
って心構えしてたのに。
「えっと～じゃぁ出席番号の反対順から！」
とかいう、よく分からない先生の提案により
自己紹介を反対の順番でやることになった。
でも、あたしは今度は最後になっただけだし。
あんまり変わったもんじゃない。
自己紹介はだいたい手短なもので、名前と出身の学校
それと特技とか趣味とか――――。
女子も男子もそれなりに無難にやったり、

メチャクチャアピールしてみたりとかそれぞれの個性が出るのが自己紹介だ。

聞いてるとそれなりに面白い。

ちなみにあたしはもちろん無難にやるタイプ。

そしてついにあたしの前、つまり朝上春樹に順番が回ってきた。

「綾見中学出身の朝上春樹です。好きなものはサッカーで…」

かっこいい分みんなの注目度がすごい。

そりゃそうだよね。

かっこよくて、サッカーうまくて（あたしは知らないけど

背も高くて、新入生代表やっちゃうような男子ならモテモテなのも無理ないよね。

キャーキャー騒がないあたしが若干浮くぐらいにクラスの女子はみんな騒いでる。

「ちなみに今は、この明津紫苑と付き合ってます」

へ〜、明津さんねぇ…。

このクラスに明津って二人もいるんだ〜。

って…え？

二人もいるわけないよねぇ？

だってあたしの後ろの朝上春樹だもん。

当然あたしの後ろか前にいるはずだ。

っことは明津紫苑って…もしかしてあたしぃ！！？

「な、何言ってんのよ！あんた！！」

君は傷ついてる。

さらりと全く意味不明なことを言い放った朝上春樹。

「意味わかんないんですけど！！」

大声を出すあたしに対して、朝上春樹は飄々とした態度で声を弱めて

あたしにしか分からないように言った。

「一言で分かれよ。

俺とお前は付き合ってんの」

「だ、だからなんでいきなりそうなるのよ！」

あたしもつられて声を弱める。

「別に良いだろ？

とりあえずそういうことにしとけ」

「なんでよ？さっきも言ったけどあたし

あんたのことも覚えてないんだからね？」

「知ってるよ。

だから覚えさせてやろうと思って。

だから、そういうことにしとけ」

「うぅ…わかった」

なんとなく同中だったのに知りもしなかったことにささやかな罪悪感を覚えてしまったあたしは

見事に朝上春樹の戦略にはまってしまった。

「えっと…綾見中の明津紫苑です。よろしくお願いします…」

集まりきった視線に耐えられずあたしは、クラスで1番手短に自己紹介を終えた。

そして、質問タイム。

しかし、もう質問はあるひとつのことで持ちきり。

それはもちろん…

「朝上君と明津さんって本当に付き合ってるの！？」

女子からの質問攻め。

朝上春樹はその質問にまたもやさらりと

「付き合ってるよ」

と答える。

あたしは、返答に迷いに迷いながら朝上春樹の答えにつられて同じように答えた。

でも、それだけならまだ別によかったんだけど。

「なんで明津さんなの！？

天城さんの間違いじゃなくて！？」

…ズキン。

あたしの心は密かに動いた。

何も言い返せないもどかしい気持ち。

だって…あたしにだって分からないのにそんな質問、答えられるわけがない…。

でも、分かってることは一つだけ。

あたしと朝上春樹はつりあってない。

だから、瑞希の名前が出てくるんだってこと…。

君は後悔してる。

あの質問攻めが終わったあと、あたしは帰り支度をして真っ先に教室をでた。

朝上春樹に文句の一つでもいってやろうと思ってたけど

もうそんな気力はなかった。

だってあたしは今日あんなにあたしにとってもっとも残酷な質問攻めを聞いてしまったから。

『なんで明津さんなの？』

『天城さんなら諦められるのにー』

あたしはそんなに質問攻めを前で聞いていた。

本人達は、聞こえてないつもりなのかもしれないけど

あたしにはしっかりと聞こえてしまった。

…あの時、ちゃんと付き合ってないって言っておけばよかった…。

今更になってあたしはすごく後悔した。

今日はせっかくの入学式なのに。

こんなに気分が沈んだ入学式なんて初めてだよ…。

あたしは、誰にも悟られないように心の中で何度も繰り返した。

『しょうがないよ…。あたしは瑞希とは全然違うんだもん…』

いつもあたしが瑞希とのことで辛くなった時に繰り返す言葉。

あたしは瑞希とは違うんだ。

可愛くもないしあんなにみんなが集まるほどの魅力もない。

あたしは…ダメなんだ。

教室を出て、廊下を歩きながらあたしはただただ頭の中で言葉を繰り返した。

その時。

「明津っ！」

君の告白。

「明津っ！」

「え？」

振り向くとそこには朝上春樹が息を切らして立っていた。

「なんで勝手に帰るんだよ！」

「だって…」

言い返す言葉がないというよりも、これ以上誰ともかかわっていたくないという感情が

今のあたしの中では最優先だった。

「なんで文句の一つもいわねーで帰っちまうんだよ！

あの時みたいに言えよ！」

「あの時…？」

あたし、朝上春樹になにか文句言ったことあったっけ？

う～ん、覚えてないんだけど。

「あの時って…いつのこと？」

「いつってお前それも覚えてねぇの？」

「さっぱり」

ガクっとうなだれる朝上春樹。

そんなにあたしすごいこと言ったの？

もしかしてあたしに恨みがあるとかっ！？

「てか、この際言うけど。

俺、お前のこと本気だから」

「ふぇ？」

「だから、お前のことを彼女って言ったことだよ。

あれ、面白半分とかいい加減な気持ちとかじゃないから」

「えっと…それはどーいう意味で…？」

「～～～～～だからっ！お前の事、好きだってことだよ！」

「えぇ！？」

ま、まってよ！！

あたしのことが好き！？

瑞希じゃなくてっ！？

って…またこんな所で瑞希をだしてしまう自分が情けないけど…。

こいつの言葉もにわかに信じられない。

だって…自慢じゃないけど告白されたことなんて一度も…。

いや、一回だけある。

あれは…あたしにとって1番苦い思い出だけど。

しどろもどろするあたしを見ながら朝上春樹が楽しそうに見る。

そして、最後に魔のひと言。

「覚悟しとけよ。

絶対にお前のこと堕とすから」

君の好きな人。

「絶対に堕とすから」

そういい残して、呆然とするあたしの前をするりと抜け出して

一人楽しそうに帰っていった。

…え～っと…これは嫌がらせ…なわけないか。

でも、なんであたし？

クラスどころかこの学校には結構可愛い子が多いのに、

なんでそんな中であたしのなの？

腕を組みながらぐるぐると考えると。

「紫苑！なんで先に言っちゃうのよ！」

「えっ！？あぁ瑞希ごめん！」

「珍しいね、紫苑が何か忘れるなんて」

「ん～そうだよね…」

「何かあったの？」

ドキッ。

…こー言うのって話すべきなのかな？
でも、確信があるわけなしじゃないし…。
今はまだ良いよね？
「ううん、なんでもないよ」
「そっか。
あ！そうだずっと紫苑に話そうと思ってたことがあるんだけど…」
「何？」
一呼吸ためらって瑞希が口を開いた。
「…あたし、好きな人出来ちゃった」
「え？えぇっ！？
好きな人！？誰々？うちの学校？」
「紫苑のクラスの…」
「あたしのクラスの…？」
ごくりと息を飲む。
瑞希が好きになる人っていったい…。

「えっとね…朝上春樹君」

「あ、朝上春樹ぃ！？」

「ちょ紫苑！声大きいってば！」

「ご、ごめん…でもなんで？」

「う～ん、何でかなぁ？でも、ずっと気になっててて…」

さすが無駄にかっこいいだけある。

瑞希までもをしとめるなんて。

瑞希はいっつも告白をされる側であって告白するなんて話は聞いたことがなかった。

その瑞希がっ…しかもよりによって朝上春樹を…

好きになっちゃうなんて…！

君のタイプは誰？

朝上春樹と瑞希の二人の告白を聞いた次の日。

あたしは朝から朝上春樹を呼び出すタイミングを計るのに必死。

なぜかって…。

理由ははっきりしてる。

「朝上君ってぇ、どんな子がタイプ？」

「可愛い系？それとも美人系？」

「あーそれ聞きたいかもぉ！」

朝上春樹の周りの見渡すばかりの女子！

あの群がる女子の中をこのあたしがどうやって突破できるものか…。

てか、なんなのよこの人だかり…。

それにしても本当に朝からテンション高いなぁ…。

「俺のタイプ？可愛い子かな」

群がる女子の質問に律儀に答える朝上春樹。

しかも可愛い子って…昨日あいつあたしのこと本気だって言ったよ

ね。

可愛い子なら全くあたしに当てはまらないじゃない…！

なんかちょっとムカつく。

「特徴とかは？もうちょっと具体的に…！」

「そうだよ。もうちょっとヒント！」

なんのヒントよ！

「ん～人名で言うとあいつみたいな感じ？」

朝上春樹が指を指す。

そしてその先には…

「明津さんっ！？」

あたしぃ！？

「な、なんなのよ。いったい！」

思わず思ったことが口に出る。

「いや、だから昨日も言ったじゃん。本気だって」

「いや、それは聞いたけど…。

あれって冗談とかじゃないの？」

「んなわけねぇだろ。

嘘であんなこと言うかよ」

そりゃそうだよね…。

なんて、二人で会話してると。

…女子の視線が痛い、痛い。

もういいや！この際呼び出して話したほうが早い！

「朝上春樹！ちょっと来て！」

「あ？何？」

勢いよく立ち上がったあたしはその勢いで朝上春樹をつれて女子の群れを抜け出した。

君の笑顔に不覚にも。

「なんのつもりよ！」

「なんのって、そのままのつもりなんだけど」

教室を抜けてあたし達は屋上へ向かった。

もうすぐホームルーム始まっちゃうけどまぁいいや。

「意味わかんない！もうちょっと分かるように言ってよ！」

「おいおい…ここまで言ってもわかんねぇってお前そうとー鈍いな」

に、鈍い！？

あたしがっ！？

「べ、別にいいでしょ！

自慢じゃないけどあたし告白とかされるの初めてなんだけど！」

「へぇ、それはラッキーだな」

「何がよ」

「つまりは、俺が始めての彼氏って訳だろ？」

む、ムカつくっ！！

「言っとくけど、あたしだって彼氏くらいいたことあるんですけど？」

余裕といやみをたっぷりこめて言い返す。

「ふうん、じゃあこーいうのは初めて？」

「きゃっ」

そう言い放った後、朝上春樹は壁にあたしを押し付けて両手をあたしの頭の横において逃げられなくする。

これって…

「押し倒されたりするのはもう経験済み？」

カァァァァ。

一瞬で自分の顔が赤くなっていくのが分かる。

「あ、やっぱり初めて？」

「ば、バカ！」

あたしは逃げようと必死で手をどけようとするけどビクともしない。

火照った顔はまだ熱いまま。

そんなあたしを見て朝上春樹が言う。

「お前、やっぱ可愛いのな」

あたしの体が硬直する。

な、何言ってんのよ！こいつ！

そうは思いながらもどんどん顔が熱くなっていく。

なんだか恥ずかしくなって顔を背けて抵抗をやめる。

「俺さ…、本気だから」

「え？」

「冗談とか言わねぇし。

お前のこと、マジで好きだから」

朝上春樹はそれだけ言うとあたしを囲ってた手を放す。

「んじゃ、マジで覚悟しとけよ」

いたずらっぽく笑ったその笑顔は、

不覚にも本気でかっこいいと思ってしまった。

君は何も知らない。

あの後、あたしが教室に戻るとすでにホームルームが終わっていた。

運良く先生達は職員会議で自習だったそうだ。

でも、それでほっとしたのもつかの間。

「朝上君と明津さん、どこ行ってたの！？」

「二人が付き合ってるって、もしかして本当だったの！？」

「嘘ぉ～ショックなんだけど～」

つ、ついてけないよ。このテンション…。

しかも、確かに朝上春樹はかっこいいし本当は付き合ってないけど

改めてそーいう風に言うと傷つくんですけど…。

まぁ、質問は朝上春樹が答えてくれるよね。

と、思ったんだけど。

「うっせぇな。

お前ら俺達が付き合ってないと思ってたわけ？」

「う、うん。だって…」

「言っとくけど、
俺達が付き合い始めたの、俺がこいつに告ったからだから」
「「えぇ！？」」
あたしと、周りの女子の声が重なる。
よかったぁ～あたしが叫んだこと誰にもばれてな…。
「な♪明津」
朝上春樹があたしの隣の席に座って、あたしの肩を抱く。
それだけであたしはもろに硬直。
だだだ、だってこいつがいきなり…。
しかもそれに追い討ちをかけるように聞こえて来た声。
「あわせておかないとどうなるか分かってるよな？」
な、なによこの俺様ヤロー！
でも、硬直してるのはあたしだけじゃない。
周りの女子も硬直状態。
そして、やっと硬直が解けた女子が質問。

「い、いつから明津さんのこと好きだったの？」
おいおい…本人がいる前でそーいうこと聞く？
ちょっと聞いてみたい気もしてたけど…。
「ん？中二の頃から」
「それってもしかして…あのうわさの頃だよね？」
「そうだけど悪い？」
「いや…」
中二の頃…？
なにかあったっけ？
あたしは全然覚えてないんだけど…。
しかもあのうわさって何よ？
朝上春樹にいったい何があったの…？

君のことが知りたい。

先生の登場によって一時解放されたあたしは

隣の朝上ををチラリと見た。

いつものようにご機嫌そうにイスにふんぞり返っている。

中二の時のことっていったいなんだろう…？

そんなに有名なことなのかなぁ？

しかも、その話をしたときだけ一瞬顔つきが変わった気が…。

したのはあたしだけ？

これはもう聞いてみるしかないよね。

先生が今日の予定をだらだらと話している中

あたしはそっと朝上春樹に声をかけた。

「あのさ…？」

「何？もしかして俺に惚れた？」

小声で話しかけたあたしにさらりと恥ずかしいことを言う。

思わず大声を張り上げるところだった。

「そんな分けないでしょ！
さっきのことなんだけど…中二の時のことってなに？」
やっぱり…、気のせいじゃなかった。
ほんの一瞬だけど、わずかにいつもあたしに浮かべる意地悪な笑みが消える。
なにかあるんだ。
「…なんでもねぇ」
いつもならこれでもかってくらいあたしのことからかうくせに
今に限って無理やり会話をやめようとする。
「気になるでしょ！」
そういってあたしは朝上春樹の服のすそを掴む。
普段ならこんな奴、話しかけたくもかけられたくもないけど
今は誰かが言ったそのたった一言が気になる。
その中二のときのことが分かれば、なんで朝上春樹があたしの事を好きだなんて
からなうのかも分かるかもしれないし。

「…いいから今は、話しかけんな」

「なんでよ？」

こいつがこんなこと言うなんてよっぽどのことだ。

何が何でも聞き出してやる！

なんて意気込んでた矢先。

「怒られんぞ…」

「ふぇ？」

気がつくと先生の声がしない。

びくびくしながら前を向くと。

「そんなに俺の話がつまらないか…」

はんにゃの形相でため息をつく先生が。

いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

それからあたしが職員室につれられてみっちりとお説教されたのは言うまでもない。

君のぬくもり。

「つ、疲れた…」

職員室でみっちりと怒られたあたしは、

なんとか無事に出てこれた。

外を見ると日も落ちてすでに真っ暗。

帰宅部な上に瑞希には先に帰ってていいっていっちゃったし…。

帰りは一人かぁ…。

憂鬱気味に教室へ歩いていると、

あたしのクラスだけ明かりがついていた。

誰かいるのかな？

「よぉ」

「朝上　春樹！？」

「なんでフルネームなんだよ…」

なんでこいつが教室に！？

あたしの知る限りではこいつも帰宅部のはず…。

「こんなに時間かかりやがって。
もうすぐ七時半だぞ」
「え…？待っててくれたの？」
「悪ぃかよ」
「いえ…悪くないです」
い、以外だ…朝上春樹があたしのこと待っててくれてるなんて…。
もしかして何かたくらんでたりしないよね？
「ほら、帰るぞ」
「う、うん」
朝上春樹にせかされて、急いで支度をして教室をでた。
教室を出ると廊下は真っ暗…。
さっきまでついてた教室の明かりもないし結構、迫力がある…。
あたし、お化け屋敷とか苦手なんですけど…。
内心ビクビク。
そして、それを朝上春樹に気づかれないようにするのに必死。

こいつにバレたら絶対にバカにされる…！

「何きょろきょろしてんだよ。

もしかしてこーいうの苦手？」

ま、まんまとバレたぁ！！

「やっぱりな。

てか、顔色も悪ぃし」

「だ、だって夜の学校とか初めてだし…」

この学校は校舎自体は割りと新しいんだけどなぜかなんとも言えない迫力がある。

昼間に見ると全くそんな感じしないのに…。

こんな時にどこからともなく物音がしたりなんかしたらもう最悪だよ……。

「ガタンっ」

「ふぇ！？」

「なんか物音が…」

思わず声を上げたあたしとは違っていたって冷静な朝上春樹。

物音はどうやらあたし達がちょうどさしかかった教室からのものみたいだ。

「入ってみるぞ」

「えぇ！？

や、やめようよ！！」

「じゃぁ、お前ここで一人で待ってる？」

「そ、それも嫌だけど…」

「それなら行くぞ」

な、なんでそんなに入りたいわけ？

こっちはもう叫びだす寸前なんですけど…。

「ったく…ほら！」

呆れたように朝上春樹があたしに手を差し伸べる。

…これって、手ぇつなげってこと？

それもそれで嫌なんだけど…。

「…置いてくぞ」

「行きますぅ！！」

あたしは勢いよく朝上春樹の手の上に自分の手を重ねる。

あったかい…。

重ねた瞬間に感じた力強さとそのぬくもりに

あたしは不覚にもドキッとしてしまった。

君の名前。

朝上春樹はあたしの手を引いて教室に足を踏み入れる。

でも。

（がさがさがさっ）

「や、やっぱり無理ぃ～！！」

さっきから不規則になる物音にあたしは小さな声で絶叫。

これが絶叫せずにいられますか！！

真っ暗な教室で物音ってものすごくべただけど、

実際に体験してるみるとありえないほど怖い。

それでもあたしが逃げ出さずにギリギリ耐えられているのは

朝上春樹が手を握ってるから。

てゆーか逃げたらあとでどーなることか…。

それも結構怖い。

「あ、朝上春樹ぃ…。

もう帰ろーよ…」

あたしの声に多少の反応をしながらも、
一歩一歩確実に物音のする方向へ向かっていく。
「そんなに苦手なわけ？
大丈夫だって、ほら」
朝上春樹がさっきよりも声を大きくしてしゃべりながら
教室の隅の方を指差す。
その瞬間…
「…きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
う、う、う、動いたよ！？
今、真っ黒な影が…。
「何やってんだ？お前ら」
「何でもないっすよ。
それじゃあ、帰るんで」
「あぁ、気ぃつけてな」
正体が分かってもなお、体を硬直させ気味のあたしの手を

再び引いて教室をでる。
あぁ…なんてべたなオチ…。
一人で騒いでたあたしがばかみたいだ。
てゆーか、ばかなんだろうけど。
「な？言っただろ？
大丈夫だって」
「うぅ…ごめん。
でも、先生だなんて思わなかったんだもん」
あたし達が入った教室にいたのはそのクラスの担任の矢田部先生だった。
もうだいぶ年な先生で、再来年には定年らしい。
当然耳も遠いわけで…。
あたし達の声も聞こえなかったみたいだ。
「てゆーか、なんでフルネームなわけ？」
「へ？」

「名前だよ、俺の名前。
お前フルネームで呼んでるだろ？」
「えっと…な、なんとなく？」
一度覚えてしまったときのインパクトが大きすぎてフルネームで覚えてしまった上に
なんか苗字で普通に呼ぶのもむかつくから
いつもフルネームで呼んでいた。
それを今更なんでといわれましても…。
「じゃぁ名前で呼べよ」
「名前って…朝上？」
「それは苗字。
いつも読んでるじゃんお前。
朝上，春樹，って」
名前の部分にアクセントをつける。
ようするに…春樹って呼べと？
「む、無理だって！！」

「なんでだよ？」

「だ、だってあたし…

男子のこと名前で呼んだこととかないし…。

メチャクチャ恥ずいし…。

てか、朝上春樹だし！」

「最後のはむかつくけどそれは理由にならねぇだろ」

む、むぅ…。

それはそうだけど…。

「じゃぁ、朝上春樹はあたしのこと普通名前で呼べる？」

この切り返しはうまいぞ！あたし！

この恥ずかしさが分かれば朝上春樹だって名前で呼べなんて言わないはず…。

「紫苑」

「ふぇ？」

「だから紫苑。

お前の名前だろ？」

あたしの名前をさらっと言ってのける朝上春樹。

ず、ずるい！

なんでこんなにさらっと言えるわけ！？

「俺、呼んだんだけど」

「……るき」

「は？」

「春樹！！」

半ば脅された勢いに任せて春樹の名前を叫ぶ。

は、恥ずい／／／／／／

呼んだ後、すかさずくるりと春樹に背を向ける。

今、あたし顔すごい真っ赤…。

でも、なんかおかしい。

こんなに顔を真っ赤にしたあたしを春樹がからかわないはずがない。

そろりと春樹の方を向き直ると

「ば…！こっち見んな！！」

「え？え？」

振り向いた瞬間、少しだけ見えた春樹の顔。

あ、赤かった…よね？

今はあたしに背を向けてしゃがみこんでるから見えないけど確かに赤かった。

「は、春樹？」

「あのさぁー…」

「な、何でしょうか！？」

「お前は…俺の事なんとも思ってねぇから、

名前呼ばれても普通なのかもしんねぇけど…」

「は、はい」

「俺はお前に惚れてるから

そんなふうに顔赤くして名前呼ばれると困んの！！！」

叫ぶようにして春樹が言葉をつむぐ。

こ、困るって言われても…

「春樹が呼べって言うから…」

「そうじゃなくて！！」

春樹はがばっと立ち上がるとあたしが何がなんだか分からなくなるくらいの速さで

あたしを壁に押し付ける。

えぇ！？またこの状況？？

てか、春樹メチャクチャ顔赤い…。

「だから…お前が、可愛過ぎんの」

そういって春樹はあたしを優しく抱き寄せた。

ちょうどあたしの耳に当たった春樹の心臓の音が聞こえる。

…すごく早い。

冗談とかじゃないんだ…。

前に見たいに危機感を感じる状況じゃなくて、

すごく温かくてなぜだか安心した。

いつもならからかわれてる気がしてしょうがなかったけど

この時だけは、素直に受け入れられる気がした。

君を信じて良いの？

あの後、春樹はあたしを包んでいた手を緩めると

ゆっくりとあたしの歩調に合わせるように歩き始めた。

帰り道、あたしと春樹の間に特にこれと言って会話はなかった。

でもその沈黙は不思議と苦痛じゃなくて

穏やかな沈黙だった。

春樹はあたしを家まで送ると

「じゃあな」

と、一言だけ告げると自分の家に帰っていた。

その後姿を見送りながらなんだかちょっと恥ずかしくなってきた。

あ、あれってどういう意味なんだろ？？

実際に抱きしめられてるときはなんかすごく安心しきっちゃって

幸せな気分に浸ってたけど今思うとすっごく恥ずかしい。

しかも可愛すぎるって…／／／

なんか…こっちが不安になるくらい真っ直ぐな瞳で

拒否できなかったっていうか、受け入れちゃったって言うか…。

てか、本当にあたしのことからかってたわけじゃなかったんだ…。

いやいや、まだ絶対とは限らないけど。

でも、あれが演技っていうのはちょっと信じられない。

本気だった…気がするんだ。

あたしの勘違いかもしれないけど。

なんとなくだけど居間の春樹なら信じられる気がする…。

信じて良いんだよね？

春樹なら――――――

君にキュンとするあたし。

どーしよ！？

しょっぱなからこんなこと言ってるのもおかしいけど

本当にどうしたらいいの！？

き、昨日のこと引きずりすぎてあんまり眠れなかったし。

家に帰ってからというものあたしは

春樹のことを思い出しては赤面していた。

な・の・に。

今日学校であったらどんな反応すれば良いのよーーー！！？

悩む…すっごく悩む。

あんまり眠れなかったあたしの顔は本当にひどかった。

目の下に…盛大に出来たくま。

目だけをとりあえず冷やすとあたしは支度をして家をでた。

入学式の日と帰りだけは瑞希と一緒だけど普段の日は家も遠いし、

一緒には行ってない。

て、いうより…。

ど、どうしよう？

刻一刻と学校に近づいて行ってるよ？

よし！！今日は出来るだけ春樹を避けて…。

（トントン）

突然肩をたたかれて振り向くと…。

「おっす」

いやぁぁぁぁぁ…。

いつも通りの春樹の顔！

しかもなぜだから。

「春樹！近い近い！！」

「そうか？」

メチャクチャ度アップの春樹の顔。

な、なんでそんなに近いのよぉ～。

ただでさえ今日は意識してるっていうのに…。

「あ、もしかして俺のこと意識してんの？」

早速バレタァァァ！！

フ…終わったな、今日のあたし。

昨日ならともかくこんなあたしを春樹がからかわないはずがない。

案の定。

「へ～、やっぱ意識してんだ～」

春樹が意地悪そうな笑みを嬉しそうに浮かべる。

こんのっ…S！！

だいたいなんでこんなにあたしが意識してるのに

春樹ばっかり余裕なのよ！！

普通、こーいうと時ってあたしじゃなくて

春樹が照れたりだとか、顔を赤らめるべきなんじゃないの？？

なのになんであたしばっかっ…！

「俺のこと好きになった？？」

「なるわけないでしょ！！バカ！！」

腹いせ交じりに春樹をバカ呼ばわり。

ちょ、ちょと言い過ぎた？

「分かってるよ、バーカ」

…前言撤回、春樹にはこのくらいが丁度良い。

なんて思ったのに。

「…待ってるよ、お前が俺のこと好きになるまで」

…なんでこんなにこっちがキュンとしちゃうようなこと言うのよ…。

バカ…。

君の心に隠された意味。

甘い言葉を吐いたのもつかの間のことで、

その後、教室でＨＲが始まるまでたっぷり春樹にからかわれた。

むぅ…なんか悔しい…。

でも、春樹と一緒にいたおかげで女子からの痛い視線はあまり感じなかった。

もしかしてちょっとは考えてくれてた…？

先生の話を聞きながらチラリと春樹を見ると、

「お前、意識し過ぎ」

小声ではかれた言葉にあたしは発狂寸前！

絶対にない！こいつがあたしのこと考えてくれてるはずがない！

うん、もう昨日のことは忘れよう。

そう心に誓いながらもたびたびからかわれるたびに

思い出す羽目になってしまった。

そしてようやくお昼休み。

あたしは春樹にからかわれる寸前で教室を出た。

「瑞希〜」

即、瑞希の下へ避難。

「どしたの〜？

今日は一段と疲れてるね」

「それがさ〜…」

春樹がね…と続けようとした言葉を無理やり飲み込む。

そいえば…瑞希って春樹のこと好きなんだよね…。

こんな話したらいくら瑞希でも傷つくよね？

「それが、何？」

「ん、いやそれがさ〜、

今日の授業で当てられちゃって大変だったんだ」

嘘、付いちゃった…それも瑞希に。

なんかすごく罪悪感。

でも瑞希可愛いし、いくら春樹でも瑞希に告られたら付き合っちゃうんだろうなぁ…。

頭で分かっててもなんだかすごくショックだった。

なんでだろ？

「どうかしたの？」

「ん、なんでもないよ！」

きっとあたし、告白されるとか初めてだし

いくらからかってたにしてもきっと嬉しかったんだ。

それだけ…だよね。

「それより早くお昼食べよっ！」

お腹がすいたことに紛らわせてあたしは少しだけ切なくなった心を隠した。

君の願いは一つだけ。

お弁当を食べ終わって瑞希としゃべってるとすぐに時間は過ぎた。

チャイムギリギリで教室に戻る。

…また春樹にからかわれるのだろうか。

あいつ…誰かにしゃべってたりしないよね？

ほのかな不安を胸に教室へ入ろうとすると、教室の少し端の方へとあたしの視線は注がれた。

このクラスでも特に可愛い女の子達と男子数人と春樹が机を囲んでしゃべっていた。

みんな楽しそうなのはもちろん、女の子達の目は

他の男子数人じゃなくて真っ直ぐに春樹に向けられていた。

そして、春樹もそれに答えるようにして…楽しそうに笑っていた。

それを目にしたあたしは扉の前で春樹に見つかる前に姿を隠した。

…あぁ、まただ。

なんで…あんなことでショック受けてるんだろう。

こんなこと、人に裏切られることなんてとっくに慣れたはずだった

のにな。

しかも、春樹だし。

なんでこんなにショック受けてるの？

春樹が女の子達とお弁当食べてたから？

それがすごく楽しそうだったから？

春樹の笑顔が…あたしといるときなんかよりも…楽しそうだったから？

……違う。

そんなこと、今更ありえない。

あの時決めたんだ。

無駄なことはしないって。

嫉妬とか、そんなこともうしないって。

全部全部、慣れて生きてくんだって。

あたしが願うのは一つだけ。

…傷つかずに生きていくこと。

弱虫だっていわれるかもしないけど、あたしは本気だ。

これ以上に願うことなんて…ない。
あたしは…そう決めたんだ。
あたし自身が…そう決めたんだ。
何事もなかったようにくるりと体を教室の方へ向かう。
そう、あたしには関係ない。
あたしがショックを受ける必要もあるはずがない。
いつも通り…過ごせば良いだけ。
恋は女の子を変えるって言うけど、そんなの嘘だ。
それにいくら変われたって裏切られたんじゃ意味がない。
いつも通り――――――――――　……。
ちょうど鳴ったチャイムと一緒に、あたしは席に着いた。
「どうしたんだよ、さっき」
春樹が小声であたしにささやきかけた。
…見つかってないつもりだったんだけどな。
でも、隠し通せる。

あたしなら。

ずっとそうやってきたんだから。

「うんん、なんでもない」

あたしはいつになくにっこりと微笑んだ。

君の強がり。

その後もさんざん春樹にからかわれたけど、
それにさえもいつもと同じように接した。
あたしはなんでも、こんなに気づかれたくないんだろう？
なんでこんなに…春樹のこと気にしてるんだろう？
「お前、今日どしたの？」
「え？何が？」
平然を装う。
これはあたしの特技。
何があっても何でもないフリをする。
強がりだって分かってるけど。
「なんか…変じゃねぇ？」
「別に？普通だけど？」
にこっりと笑う。
でも、本気では笑ってない。

ただ気づかれたくない一身で浮かべた笑み。

「だから…、もういい。

何でもねぇよ」

春樹はあたしに何も聞かずに去っていった。

よかった…、気づかれてないよね？

ちゃんと笑えてたよね？あたし。

ＨＲ終えたあたしは、帰る支度を終えて教室をでる。

廊下の遠くで瑞希を見つけたけど声はかけなかった。

今…瑞希にあったらあの時のことを嫌でも思い出してしまう。

あたしが大好きなものを奪われていったあの一年間。

もちろん楽しかった思い出がないわけじゃないけど、

あたしの最悪にして最低の思い出。

なによりも１番、思い出したくないこと。

もう思い出さないって決めてたのに。

下駄箱で靴を履き替えると外に出た。

今日は春にしてはすごく空が青くて綺麗だった。

そう…こんなに日だった。

あたしがあの人に裏切られたのも。

思い出せば出すほど鮮明でしっかりと覚えてる。

嫌な思い出なのにね…。

あの人の姿まで浮かんでくるような気がする…。

え…？

「よお、久しぶりだな」

「なんで…なんでっ…真崎がここにいるよのっ…」

君が好き。

あたしが通り過ぎようとしたその校門の前には
近くの県立高校の制服を見にまとった真崎がいた。
「なんであんたがっ…」
「悪いかよ？
今、この学校に彼女いるんだ」
彼女…。
もうこんな奴、なんとも思ってない。
でも、なんでよりによってこんなときに…。
あの時のことを思い出してしまったときに。
あたしを裏切った張本人と再会しちゃうなんて…。
「あたし…帰るから」
そうつぶやいて真崎の隣を通り過ぎようとする。
「待てよ。
久しぶりの再会だぜ？

お前だってまだ俺のこと忘れられてねぇんだろ？」

「いやっ…」

でも、それはそう簡単には叶わない。

忘れたいよ…何よりも。

忘れられたらもっと信じられるのかな…春樹のこと。

手首をしっかりと掴まれたあたしは真崎から離れられない。

「お前…長い間、会わないうちに可愛くなった」

昔だったらこんな言葉にもあたしだったらトキメいてたかもしれないけど

今にしたらただの嫌悪感しか沸いて来ない。

「誰か…」

「なんなら俺がもう一回付き合ってやろうか？」

嫌だっ…。

心が何度そうつぶやいても真崎との距離は近付くばかりで離れない。

お願い…誰か…

「助けて――――――…」
春樹…助けて…。
「おい」
「は？」
これは、夢じゃないよね？
「こいつ、俺の何だけど」
春樹が…助けに来てくれた…。
「っんだよ、彼氏いるのかよ。
だったらこんな奴、相手にしたりしねぇよ」
「それはこっちのセリフだろ？
こいつだってお前みたいな奴に興味ねぇってよ」
「ちっ…、ふざけんなよ」
真崎がのろのろと校門を出る。
「待てよ、
今度こいつのこと泣かしたらただじゃおかねぇからな」

春樹の瞳が鋭く光る。
まるで威嚇するみたいな冷たい瞳。
睨まれた真崎は一目散に逃げていった。
「おい…大丈夫か？」
「だ…大丈夫…」
「大丈夫なわけねぇだろ。
手も足も震えてんじゃねぇかよ」
そう言って春樹があたしの肩を抱えてる。
…本当だ…。
あたし…すごく震えてる。
「顔、あげろよ」
ずっとうつむいたままのあたしの顔を春樹が覗き込む。
それでも顔を上げないあたし。
痺れを切らしたのか春樹が一言。
「早く顔上げねぇとキスするぞ」

「えぇ！？」

思わず顔を上げるとニッと作戦成功！とでも言いたげな春樹の顔があった。

「まぁ、そんなにキス拒否られんのは傷つくけど、

今回だけは見逃してやる」

「……ない」

「え？」

自然とあたしの口からこぼれた擦れた言葉。

「…嫌じゃ…ない…」

「…お前それ、マジで言ってんの？」

「マジだもん…」

今更、言ってしまった言葉に後悔してうつむくあたし。

でもきっと、あたしは好きなんだ。

春樹のこと。

だから、女の子と楽しそうにしゃべってるのがショックだった。

だから、春樹を呼んだんだ。

隙間から見える春樹の顔は少しだけ赤いけど真剣な目をしていた。

「取り消し…きかねぇからな？」

「うん…」

あたしが目を閉じると少しずつ近付いてくる春樹の気配。

その優しい気配に安心したあたしの瞳から涙が零れてくる。

「あたし、春樹が好き…」

その瞬間にあたし達の唇は重なった…。

君の笑顔。

「照れてんの？」

「う、うるさい！！」

春樹に顔を覗き込まれたあたしの顔はたぶん真っ赤。

あの後、あたしたちは一目散に逃げて来た。

いや、正確に言うとあせってたのはあたしだけだけど…。

通りかかった生徒があたしたちのことを見ていたらしく、

春樹のことを狙っていない女子や男子や上級生にめいっぱい冷やかされた。

人の視線には色々な意味で慣れている春樹は全然平気みたいだけど

あたしはなれていないどころか、あんなところを見られたら恥ずかし過ぎるっ！

さっきから顔を覗き込まれてはからかわれているのはそのせい。

あたしを助けてくれたときの真剣な春樹とは打って変わって

ずっと春樹のことを好きだと自覚しなかったあたしをからかいたくてしょうがないらしい。

「お前が悪いんだろ？
お前があんな目立つところであんなこと言うから」
「あ、あたしは別にっ…」
「言ってないとは言わせねぇし」
「うぅ…」
さっきからずっとこんな調子。
からかわれては反論するものの春樹の一言であたしは見事粉砕…。
でも、もうすぐあたしの家！
春樹の一方的な攻撃から逃げられる！
とはいうものの。
このまま負けっぱなしっていうのもちょっと悔しい。
「じゃ、じゃぁもうあんなこと言わないもん！！」
「あんなことってどんなことだよ？」
意地悪そうな笑みを浮かべてあたしを問いただす。
「えっと…それはですね…」

「それはぁ？」

い、言えるわけ無いよ～！！

絶対に確信犯だ。

あたしが言えないの分かって聞いてるんだ。

「言えないわけ？

じゃぁ言えるようにもう一回しようか？」

「え！？」

ず、ずるい…。

今の春樹のずるさは天下一品だ…。

「自分で言うのと、こんなところでされるのと。

どっちがいい？」

「ゃ…それは…」

ここはあたしのいつもの通学路だし、万が一誰かに見られたら外になんて出れたもんじゃない。

そ、それだけは避けたい！！

「えっと…もう『キスしてもいい』なんて…んっ！？」

あたしは最後まで言葉を言い切れなかった。

だって…

「スキあり♪」

途中までで言葉を口にしてあたしの唇はふさがれた。

途中まで言わせるなんてずるい！！

「お前が言ったんだろ？

『キスしてもいい』って」

「そ、その後にダメって言うつもりだったの！！

だいたい春樹が言わせてくれなかったんでしょ！？」

あぁ…絶対にあたしが言うのを選ぶの分かってたんだ。

この確信犯め…。

そうのどまで出た言葉だけど、

春樹の嬉しそうに笑う子供みたいな表情を見たら出てこなくなっちゃった。

でも、あたしはまだこの時気づいてなかったんだ。

誰かがあたしたちのことをずっと見ていたなんて…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4958h/

君は王子様。

2010年10月26日03時47分発行